べてはるかに低い割合であった。それらはタカサゴタンポポ，イワタンポポ，コウライタンポポ，オダサムタンポポに含まれる。2倍体の地理的分布をみると，既に 2n=16 の染色体数が報告されている済州島，台湾の外，朝鮮半島で初めて京城周辺及び咸興周辺に狭い分布域が確認された。中国では，朝鮮に近い遼寧省の鳳凰山と鶏冠山で2倍体が確認されたが，他の地域では蘇州上方山のみであった。

□KITAGAWA, M.: **Neo-lineamenta florae Manshuricae.** 715 pp. 1979. J. Cramer, Vaduz. ¥ ca. 32,000. 本書は北川政夫博士が1939年に出版された Lineamenta florae Manshuricae (満洲国植物考) の改訂版ともいうべきもので，内容は前著とほぼ同じ形式をとって書かれている。北川博士が満洲で自ら採集した標本に基いて追加訂正されたものが多く，所々に著者の新見解が見られ新学名もふくまれている。また最近のソ聯・中国などの研究をとりいれた改訂も行われている。この地域の植物を調べる上に不可欠な大変便利な書である。また日本植物に関連のある新見解も見られ，ムラサキモメンヅルに対し学名の新組合せが発表されている。ただ残念なことには北川博士が苦心して集められ本書の基礎となった資料は戦禍により失われてしまって見ることができない。本書は Tüxen 教授の斡旋によって同氏の Flora et Vegetatio Mundi Band IVとして出版されたが，そのため色々の都合があって著者にとって不十分な点もあったようで，6ページに及ぶ正誤追加表が作られ，また今後更に訂正される意向とうかがっている。 (原 寛)

本書はわが国の植物研究者の外地フロラ研究の成果として，既に古典の一つにかぞえられる Lineamenta Florae Manshuricae の改訂版である。敗戦ですべてを失い，身一つで帰国した著者が，国内各地に保存されている標本と文献にもとずいて，全体にわたって書き改め追補したもので，これから，大陸のフロラと関り合いが多くなるこの時期に，歓迎される文献である。はじめ12頁にわたって満州フロラの概説がなされ，残り673 頁は分類順のリストとなっており，多くの異名，和名，分布，ノートが記されている。概してタクソンは小さ目な感じがする。新種の発表は本書ではなされていない。その代り，主に種内のタクソンで，非常に多くの新組合せがなされており，その数は 239 におよぶ。また新和名の発表も 278に達している。これらの中には日本産植物に関するものも少なくない。例えばボウフウの学名が *Saposhnikovia seseloides* となった。*Ligularia* subsect. Cyanocephalum の中に，ser. Epapposae という系が新設されている。この他に *Polygonatum quinquefolium* (ヒナヨウラク)，*Sedum Yamatsutae* (コバノキリンソウ)，*Viola Yamatsutai* (マンシュウヒカゲスミレ)，*Vicia unijuga* var. *breviramea* (エダウチナンテンハギ) の記載文が追補され，マンシュウヒカゲスミレと，エダウチナンテンハギのタイプ標本の指定がなされている。索引は属名についてのものがあるが，たくさん出て来る種以下の学名や，和名の索引がないのは不便である。 (金井弘夫)